

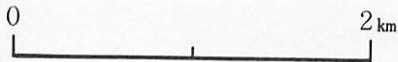
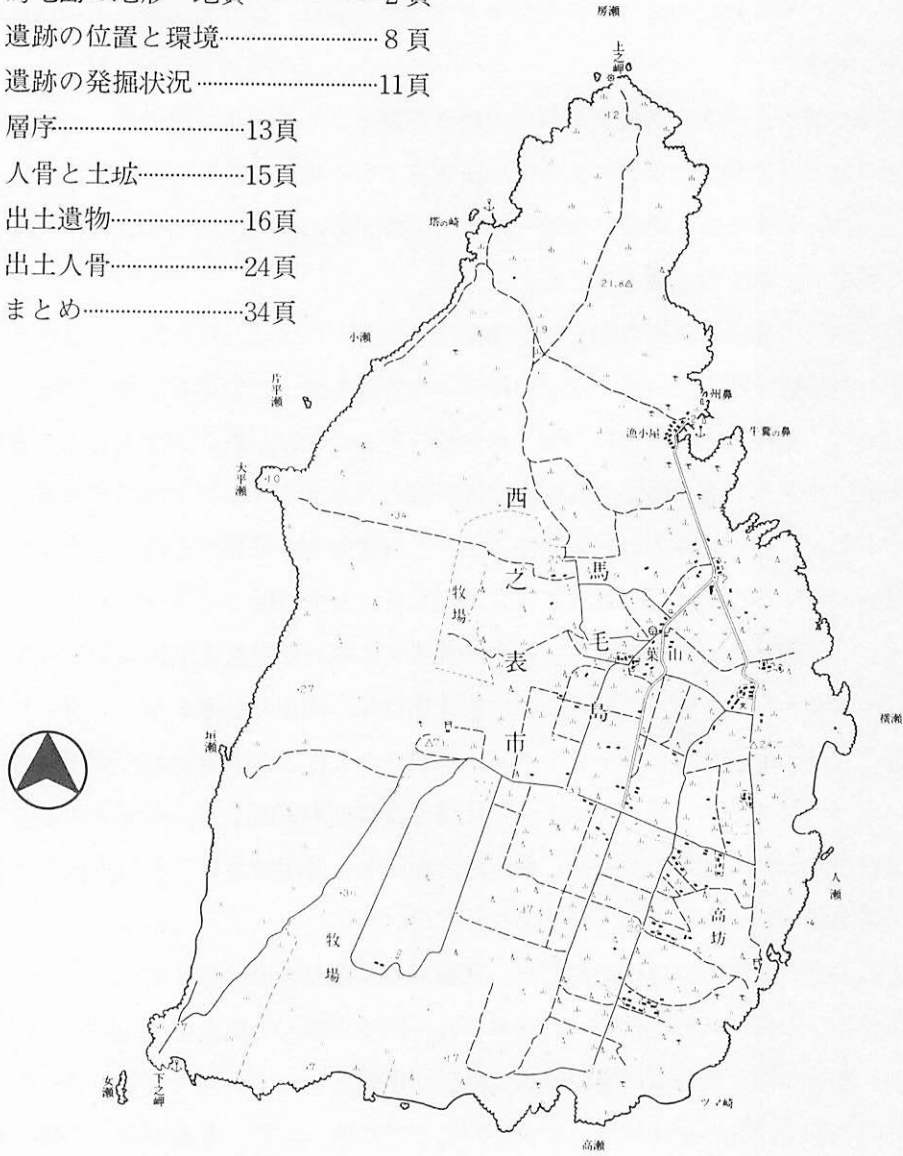
正 誤 表

位 置	誤	正	位 置	誤	正
目次	… <u>34</u> 頁	35	25頁17行	<u>孤</u> 状	弧
1頁 3行	<u>拡</u> 壁	圪	26 " 5, 6行	<u>孤</u> 長	弧
" " 5行	<u>棧</u> から	機	27 " 16, 17 "	<u>孤</u> 長	弧
" " 21 "	<u>馳</u> けつけ	駆	28 " 14行	<u>数</u> 室	教
" " 25行	助手),	・	29 " 2(表)行	<u>古</u> 胡	吉
2 " 7行	平 <u>担</u> 面	坦	" " 16行	上腕骨骨	(トル)
9 " 3行	上 <u>熊</u> 野	能	30 " 7 "	ある <u>の</u> と	との
11項19 "	アルフ <u>ア</u> ベッ <u>ド</u>	ア, ト	33 " 23 "	<u>郡</u> 島	群
15 " 2 "	砂採りの <u>拡</u>	圪	34 " 10 "	調査概報 [✓] _△ 1958	
17 " 下 8 行	<u>供</u> 伴	共	(挿入) 考雜 vol. 43		
21 " 5 "	<u>胞</u> 厚帯	肥			

馬毛島埋葬址

目次

はじめに	1頁
馬毛島の地形・地質	2頁
遺跡の位置と環境	8頁
遺跡の発掘状況	11頁
層序	13頁
人骨と土坑	15頁
出土遺物	16頁
出土人骨	24頁
まとめ	34頁



馬毛島全図

はじめに

椎ノ木遺跡の発見は、1978年、馬毛島の地質調査に従事中の埼玉県立朝霞高等学校教諭初見祐一氏が砂採り工事の掘壁に露出した古人骨を目撃されたことによる。氏は地質学上の所見と合せてこのことを西之表市教育委員会に通告し、その重要性を指摘された。教育委員会では埋葬址であることを重視し、棧から馬毛島が石油基地に使用されることが日程にのぼっていたのでその煙滅を恐れ、取り急ぎ調査の実施を決めたものである。

1978年暮れ、西之表市教育委員会の鯨島安豊氏より馬毛島の埋葬址について概略の通知があり、小規模な調査であるので研究室で引き受けて欲しいとのことであった。離島のことであるし、準備に慎重を期する必要があるので、1979年3月、現地に3泊して視察し、調査の手順を考えた。

この遺跡は非常な離島の、しかも海岸段丘の直下に形成された砂丘に立地し、前面に広い珊瑚礁を控えている、などの際立った特色を持つので地質学者の援助を得る必要があり、発見者の初見氏に御協力をお願いすることにした。また人骨の処理が調査の重点のひとつであるので、九州大学医学部永井昌文教授に門下の専門家の派遣を懇望することにした。いずれも御快諾下さり、調査実施の見通しを得ることができた。

発掘調査は1979年8月19日～27日に実施した。台風に逢って2日を延長したものである。この間西之表市教育委員会社会教育課文化係主査鯨島安豊氏は現地折衝・調査基地の設営・台風を衝いての命がけの物資補給等、調査の基礎を支えて下さり、調査完遂の支柱の役割を果たして下さった。永井教授のもとより派遣された中橋孝博氏、援助に駆けつけて下さった九州大学大学院博士課程の木下尚子君、奄美考古学会の中山清美君にも大変お世話になった。また西之表市文化財保護委員上妻紀夫氏も後半の調査に御参加下さった。以上、衷心よりお礼申しあげたい。

この調査の全体の指揮は白木原が、発掘調査の指揮は甲元がとった。上記の他の調査参加者は中村愿(研究室助手)、宮本千絵・熊谷智徳・小畑弘己(学部学生)の4名である。遺物整理・実測等の室内調査は中村が指揮をとって研究室全体が当った。なお本文の執筆は発掘の総体について中村がまとめた他、地質・遺物各論・人骨所見等は初見・木下・中橋の各氏にそれぞれお願いした。永井教授は自ら人骨計測と報告文作成の指揮をおとり下さった。実にありがたいことであった。

1980年3月15日

白木原 和美